

詩時評

第30回

なんぞ心には
色を思はざらんや

松本衆司

「歌は思ふことを程よくいひ出づる物なり。心に思ふことは、善悪に関はず、詠み出づるものなり。されば心に思ふ色欲を詠み出でたる、何の事かあらん。その歌よろしく出で来たならば、これまたなんぞ美賞せざらんや」とは、本居宣長の『排蘆小船（あしわけをぶね）』の一節である。僧侶が恋の歌を詠むことを非難する世間に対し、ややあきれながら、「僧とてなんぞ心には色を思はざらんや。」大切なことは心に思うことを歌うことだ、と。尤もなことだ。

細見和之歌詞集『京大からタテ看が消える日』（濠標）を読む。タイトル詩を引く。

落ちたリングが枝に戻り／月が落下する日

／アインシュタインならきつと言うでしよう
／時計台のあるところ／必ず時空は、ゆがむって／そんな日が来るのだろうか？
／そんな日が来るっていつのか？／そんな日
／がもう来てるのかもしれない／そんな日
／が……／鳥が空を飛ばなくなる日／魚が海を泳がなくなる日／学生も教員も、声をあげなくなる日／京大からタテ看が／京大からタテ看が消える日／キャンパスは、学生の思いを映す／キャンパスだと／冬山で亡くなった友人は語っていたよ／そんな日が来るのだろうか？／そんな日が来るっていつのか？／そんな日がもう来てるのかもしれない
／京大からタテ看が消える日

十年前、五十歳を過ぎて、自らの今までの詩に曲をつけ、再び歌い始めた詩人の歌詞集である。このタイトル詩の次の頁を繰ると「夢のなかで約束の時間に遅れないように」という詩が載る。「夢のなかで約束の時間に遅れないように／今夜は腕時計をつけたまま／眠りましょう／遠くにあなを／見分けることができるように／きょうは眼鏡もはずさずに／眠りましょう／たとえあなたが／血まみれであっても／しっかりと両腕に抱けるように／勇気も確かめて／眠りましょう」この詩は一九八九年に出版された詩人の第一詩

集『沈むブルー』に収められている詩。三十余年を過ぎ、詩人にずっと流れ続けているものがある。それは真実を求める「勇気」だ。黒羽英二詩集「不思議なるもの」（土曜美術社出版販売）を読む。「不思議地球に生まれて」を引く。

気がつけば／地球にいた／ダンゴムシやミミズやトカゲがいつばいいた／カマキリやトンボやカヤセミやカナブンがいつばい飛んできた／気がつけば／地球は花園だった／スマレ咲きタンポポ丸くなりチューリップ伸び上がり菊咲き誇り高く／千日草慎重らしく向日葵驚かせ桜潔く椿決然と福寿草地球は目まぐるしかった／ジテンシヤがジドウシヤがデンシヤがキシヤがたくさん走っていた／キキユウがヒコウセンがヘリコプターがヒョーキがロケットがたくさん飛んでいた／気がつけば／地球は広かった／タンポポがありハタケがありカワがありケがありヌマがありヤマがあった／ウミがありシマがありまたウミがありとうとう帰って来れない者もいた／気がつけば／地球はまぶしかった／オヒサマがオツキサマがオホシサマがマブシクキラキラヒカリカガヤイテイタ／街のネオンが駅のがライ

トがビルのアカリが店の飾りが街頭の列が眩しかった／／気がつけば／地球には／ヒトという名のイキモノだけが歩き廻り増え続け僅か百年の間に／十億から二十億そうして五十億から百億となり共食いし殺し合っていた／／気がつけば／地球では／四百もの薬漬け食品を食べ続け癌まみれになりながらも八九十百と生き続け／腹筋を鍛え腕立て伏せを続け一万歩歩き廻って認知症になり介護されて死んだ／／気がつけば／地球では恐竜が体全部を武装しマンモスが牙を磨いたように大脳を絞り抜いて／原子力電磁波を極限まで発達させ空襲原爆を昔話に変えて自滅を加速した／／気がつけば／地球という名の／塵芥集まって球体となり核分裂続ける太陽の周りを廻る奇蹟の星に／ほんの一瞬蠢いて虫や猫と遊んだ一時を懐かしみつつ消えて行った

実は、長い詩を全文書き写すことに躊躇した。省略できる箇所はないか、と。でも、どの連もどの行も省けなかった。切実でユニークな描写がそこにあった。そして、この詩集全体が、昭和六年生まれの詩人の小学生時代から今日までの事象に「不思議」をかぶせられてあり、いずれの作も外せない。

桑田今日子詩集『へびと隊長』（詩遊社）

を読む。「カノッサの屈辱」を引く。

何故だるるか／時々、思い浮かんでしまう／カノッサの屈辱という言葉／世界史の教科書で見たのは／破門されたローマ皇帝がひざまずいて／教皇に許しを乞うている挿絵だった／皇帝の屈辱は中世の歴史に残り／後世に伝えられた／昔、軍隊の教練で街中を行進中／馬から落ちた父は／「貴様つ、馬に謝れつ。」と上官に怒られ／馬に土下座して謝つた／父の屈辱は笑い話で娘に伝えられた／その娘が床にひざまずいて／家の拭き掃除をしている／「子持たずちゃ、かわいさげに。」／どこかで聞いた一言を背に／立ち上がる膝に伝えた／／受つと／と、わなわなする膝に伝えた／／受験で覚えた／カノッサの屈辱という／奇妙なフレーズ／あと何回つぶやくだろうか／残りの人生が可笑しくも愛おしい

ふとした時に何気なく思い浮かぶ言葉や情景はきつと誰にでもあるのだろう。それが桑田さんにとっては「カノッサの屈辱」ということなのだが、人生を経るうちにきつとその「屈辱」がますますリアルになってくる。さり気ないが、魂を揺さぶる名篇だ。

松本賀久子詩集『ジャミラ記念日／被爆者

ゴジラ』（土曜美術社出版販売）を読む。「バルタンの星」を引く。

核爆発／であろうと／定められたままの／惑星の／終幕であろうと／バルタンの星は消えて／残された／数十億もの人々は／円い一隻の船に寄り添う／／お／一隻の／船に寄り添う／／彼等が／侵そうと試みた世界は／私たちの地球が／最初なのか／／それとも／ようやく見つけられた／最後の新天地でもあったのか／／世界を丸ごと／幾度も破壊し尽くすだけの／兵器核を持ちながら／何十回となく／回り続ける／奇蹟の惑星／／地球に住む／数十億の人類は／寄り添える一隻の／船がない

この詩集は「新型コロナ禍に帰天した詩人」松本賀久子の夫君原田実氏の手になる追悼の詩集。ほぼ二十年前に出された『ジャミラ記念日』の中から右の詩を引いた。悲しい来歴を持つバルタン星人は私たち愚かな地球人の辿る道かもしれないと、ウルトラマン時代の賢明な詩人の言葉だ。

鷹取美保子『骨考』（土曜美術社出版販売）を読む。「骨考——拾えない」を引く。

拾う／骨を拾う／二番目の姉の骨を拾う／

／久留米近郊の鄙びた町の／大理石もどきの火葬場／待合室のソファアは豪華な革張り／悲しみさえ沈みこませる／シーリングライトは／妙に明るく／喪服の質まで伝える／ゲームに夢中の一年生は／得点ばかり気にしている／喪主はただ右往左往し／茶菓を勧める／私は庭園の枯れ草に／風の流れを追う／／地を這うように吹く風が／姉をうまく運べるだろうか／何処へ行くかも知らず／おびたらしい華やかな花にかこまれ／姉はただ／目を瞑り続けているのだろうか／／拾う／骨を拾う／姉の骨を拾わなければならぬ／／姉を捜し／その姿を拾えないまま 私／最期の日まで 風を見やるのだろうか

「空の声、風の運ぶ言葉をとらえたいと願ってきた」と、「後書きに代えて」で詩人は言う。その風は何処からきて、何処へいくのだろうかと、「遠い先祖からの骨」を証として大切な人たちと繋がる真実の詩が並ぶ。

草野理恵子詩集『有毒植物詩図鑑』（しろねこ社）を読む。「鹿の瞳が見える（ドクゼリ）」を引く。

鹿の鳴き声が聞こえる／私は指でシカと告げた／彼は何も聞こえなくなつたと書いた

／鹿はどこにもいなかった／存在しない音に私は満ちていた／／彼が頷く度／前髪が揺れた／ドクゼリの花のようだと思つた／二人でドクゼリの根を食べる時／私は鹿の甘い声を聞き／彼は無音の中にいるのだろうか／／もしもこのままでいいなら目を開けて／／風が吹き／彼の前髪の隙間のさびしい箇所／大きく見開いた鹿の瞳が見えた

ドクゼリ(Cicuta spp.)セリ科。根に多く含まれるシクトキシンは経皮吸収もされる痙攣毒。セリに似ており、誤食事故も多い。成分：シクトキシ(Cicutoxin)致死量30mg/kg(ヒト経口)

こんなにも植物は有毒なのだ。きつとそれは植物自らの命を守るための毒なのだろう。ならば、人間はどうか。それぞれの個性もまた、生きるための「毒」なのかもしれない。草野理恵子の不思議な詩に導かれ、そんなことを考えた。

朽葉充詩集『聖域サンクチュアリ』（落標）を読む。「夏の日」を引く。

緩い坂を 歩いて登る／坂の上には 古びた 小さな珈琲館／／額の汗を ハンカチで拭う／ドアを押す／鈴が鳴る／／窓際の

席に座る／ アイス・コーヒー シロップはいらない ミルクだけ！／／窓の外の坂道を／蛍光色のグリーンのタンクトップにサンバイザー姿の娘が／自転車を下つて行く／／カナカナが鳴きだした

詩集を読まずめながら、ふと、心象スケッチという賢治の言葉が思い浮かんだ。そのように、この詩集は春を知り、修羅を知る詩人の心に映し出された現実の、詩や小説の、そして哀しいジャズの風景の実に巧みなスケッチだ。

高橋馨詩集『蔓とイグアナ』（洪水企画）を読む。第一部が詩&写真『蔓とイグアナ』、第二部が自由線画集『老いたる芸術家の肖像』、そして第三部がエッセイ『わたしのダロウエイ夫人』とある。高橋馨の詩集なり作品集は毎度かくのごとく楽しい。タイトル詩を引く。

樹木から切り落とされた蔓であろう／拾つてきてパソコンの上に乗せて眺めれば／イグアナにも見える／書斎を覗いた女房は、物好きにという顔／類似は、そっくりであつてはならない／十人が十人 認めるような類似を認めたくない／出来れば、自分だけに見える微分的類似であつて欲しい／雨

に濡れた路上で 小さなトカゲに見えた／
カーテンの外は雨である

この詩のページにはその写真が添えられている。写真で見るとかぎり、全くイグアナにもトカゲにも見えない。で、ふと気づく。この詩の視座はどこにあるのか。もしかして「書齋を覗いた女房」ではないのか。そしてそこに何を見たのか。我が家でもある光景だ。

月刊「ココア共和国」2023年2月号を
読む。秋亜綺羅の「編集前記」や佐々木貴子の「編集後記」、そして誌面全体から新しい詩のメディアとしてのいきいきとした動きを感じる。二月号の投稿詩傑作集もその一環としてのも。興味深い四十二篇の中から、二〇〇七年生ととりわけ若い染谷青吾の「郷愁の歌」を引く。

人生がこんなにも長いものなら／もう少し
子宮の中にいればよかった／あたたかいあの場所／土に還ろうとする母の乳と父のベニス／私はもう生まれてしまった／
人生がこんなにもつらいものなら／もう少し母の腕のなかで泣いておけばよかった／
やわらかいあの場所／悲しみと喜びと／私はまだ産み続けている／もう少し、もう少しだけ長く生きるから／生身の思い

出を真綿に包んだ

自我を生き始めたばかりの彼の心が痛い。その痛さを受けとめる世界として詩は存在する。私たちもそのように受けとめられて来たのだった。「ココア共和国」の活動の尊さを感じる。

季刊「イリプス」Ⅲ01通巻五十七号を読む。実力のある詩誌だ。いずれの作品も興味深く読みすすめた。とりわけ、新たに参加した野沢啓の巻頭詩「因果のきわみ」や「言語隠喩論のたたかい―時評的に」、細見和之訳のマルティン・ブーバー「賢い男と愚かな男(上)」、神田さよ「清水哲男 初期詩集について」、倉橋健一「真継伸彦―人と作品をめぐって(1)」などが印象深かった。野沢「因果のきわみ」を引く。

うしろで大きな音がして／振り向いたとたん／喉と胸に焼けるような痛みがはしり／おれはどうと前に傾いた／コンクリートが迫る／だがどういいうわけか／顔とからだを庇うことすらできない／意識が遠のいていく／まさかこのおれさまが／なんだかわからないまま／どうかなってしまうわけにはいかない／世間を思うさま手なづけてきたこのおれさまが／どこのどいつのせいかわ

からんが／そのへんの雑魚のように／ぶざまに地面にたたきつけられるなんて／けつしてあってはならない／みんなが茫然とみてるじゃないか／ひとを葬ることはじつはしょっちゅうやってきたが／まさかこのおれさまに限っては／起こってはならないはずだ／だがコンクリートに激しく衝突するこの痛さはなんだ／胸から血もあふれてくるじゃないか／……(略)……／どいつもこいつも間抜けばかり／おれを死なせたら／全員ただじゃおかないぞ／だがああ意識が薄らいでいく／心肺停止とかなんとかってこういうことか／まだこれから天下を支配する／いろいろなアイデアがあったのに／こいつらみんなの愚鈍さに／おれは死んでしまうのか／死んでも呪ってやるぞ／くそのような日本人たちめ／あっ 意識が飛んだ／おれが倒れてマッサージを受けている風景が／上空から見えている／およそ美しくないぞ／おれの自慢の「美しい国」はどこへいったんだ／おれさまの野望はまだ終わっていないぞ／くそ

誌面の許す限り、引用した。ある傲慢で自惚れの強い男の不慮の死、その闇に落ちる瞬間の末路の叫び。「因果」という言葉を見つめ直した。これもまた詩の仕事であり、詩の仕事として説得力があった。